



# 熊本地震の記憶を 未来へ紡ぐプロジェクト エピソード集

熊本市秋津校区

「熊本地震の記憶を未来へ紡ぐプロジェクト」は、内閣府事業「一日前プロジェクト」の手法に基づき、あの大地震の経験と記憶を風化させることなく、一つ一つ紡いでいくことで、これからの未来への力となるよう企画し、熊本市東区の秋津校区にお住まいの方やお勤めの方にご協力いただき実施しました。

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつ皆さまにお集まりいただき、

- ・被災前の行動
- ・体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ・日ごろから何を準備しておけばよかったか
- ・災害が発生したら、次はどのように行動したいか

といったお話を聞かせていただき、そこから導き出される教訓や身につまされるお話を小さなエピソードにとりまとめる活動です。

こうしてとりまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

令和3年3月  
秋津まちづくりセンター

## 熊本地震の記憶を未来へ紡ぐプロジェクト エピソード

(ページ・タイトル)

- 1 ① 本当にすごい 学生ボランティアの力  
② 奮闘した避難所運営 「もうこれしかないよな」
- 2 ③ 見えない部屋で支援物資の献立づくり  
④ 物資配分の難しさ 余ったおむつと渡せなかった水
- 3 ⑤ 本音を引き出せる 日頃のつながりの大切さ  
⑥ わたしたちの避難所運営とこれから
- 4 ⑦ 震度7の衝撃 本当に何もすることができない  
⑧ 近所みんなて歌いながら明かした本震の夜
- 5 ⑨ 地域みんなて炊き出し協力  
⑩ 声掛けを通じて自分自身も回復  
⑪ 近所付き合いのない住民も分け隔てなく
- 6 ⑫ 要援護者名簿の負担 一人で抱えた大変な思い  
⑬ 目的をもって生きよう ショックだったけれど励まされた言葉
- 7 ⑭ わがまま？ 高齢者の避難支援の難しさ  
⑮ 何とかして届けたい支援物資
- 8 ⑯ ささいな相談事も 自分にできることがあれば  
⑰ いざというときのために 若者が参加する楽しい防災活動を

## 一日前プロジェクト エピソード

(ページ・タイトル)

- 9 ⑱ 寝る場所は家、車、テント？ 子どもが選んでおうちごっこ
- 10 ⑲ いつもの町内放送でほんと安心  
⑳ 公園は無法地帯 防災倉庫は空っぽに
- 11 ㉑ 出産目前で地震 親戚や友人から集めた物資で産院再開  
㉒ 最初はバナナを死ぬほどもぎった
- 12 ㉓ 避難後の連絡先求め 一日中駆けずり回る  
㉔ ブルーシート張りで気まずい思い
- 13 ㉕ 高齢夫婦の安否確認「頼んでいない」 負けるもんかと続けた見守り活動で心開く  
㉖ 「一緒に、紅白？」 ～避難所運営の難しさ～

いたるところでブロック塀倒壊！

道路をふさぐブロックをあっという間に撤去！  
自衛隊員に感謝！

避難所も断水！

中学生も大活躍！  
プールの水を  
トイレへ  
バケツリレー

避難所のかさばるゴミ…

弁当ガラは  
最初から分別！

あとから大変！

避難所の生活スペースは、最初から土足禁止！

## 本当にすごい 学生ボランティアの力

熊本市 40代 小学校教諭 女性

秋津は避難する人が多く、先生たちが駆けつけた時には体育館に人が集まっていました。

鍵を開けて、避難した方々に中に入ってもらうと、みんな我先に好きな所をとるので、とにかく通路がなくなってしまっ

て。最初は土足で体育館に入ったので、汚れて衛生的にも問題になりました。

何日かすると、近くの高校生や関東から大学生グループのボランティアが来て、一軒あたりの居住スペースをきっちと測って割り当てて、通路を作って、掃除をしてくれました。

その学生さんたちの力が、私は「すごい」と思いました。その方たちは菊池少年自然の家に拠点があって、そこから全部物を持ってきて炊出しをしてくれたり、通路を作ったり、掃除をしてくれたのです。

被災地には負担をかけずに作業をしてくれたことが本当に助かったので、「これが本当のボランティアなのだ、そういうボランティアができる人間になりたいな」と思いました。



1

## 奮闘した避難所運営 「もうこれしかないよな」

熊本市 50代 小学校教諭 男性

小学校に着任してすぐの地震だったので、もうわけが分かりませんでした。同僚の先生の顔も覚えていないし、避難所にクラスの子がいたことも後でわかったくらいです。学校のどこに何があるかもわからないので、本当に役立たず状態でもどかしいばかりでした。

自宅は、瓦が落ちたり家財道具が倒れたりという被害はあったけれど、ほとんど家には帰りませんでした。秋津は自転車も通れないくらい道路がグニャグニャになっていたし、ほとんどの家が全壊、半壊で、こちらの方がずっと大変だったと思います。

眼に大きなあざができたお母さんが避難所に来られたのですが、子どもを守るためにかぶさって、自分が家財道具に当たったのだそうです。

そのお母さんが、そんな状態でも一生懸命に避難所の仕事をしていた。だから、「我々職員がこのくらいはせないかんよな」と思いました。

使命感？そうですね、授業をしないから、何をするかというと「もうこれしかないよな!」ということです。



2

3

## 見えない部屋で支援物資の献立づくり

熊本市 40代 小学校教諭 女性

避難所に物資はどんどん来たのです。

トイレットペーパーにタオルに食料に、もう何でも来るのですが、それを整理しないと避難している方に提供できないので、教務の先生と一緒にその片付けをしました。

種類ごとに分けて全部数をチェックして、賞味期限があるようなパンやバナナなんかは早く使おうねとか、缶詰はもうちょっと置いておこうねとか。

その先生が朝、昼、晩の献立を作ってくれて、その献立に合わせて、「今日はこのカップラーメンを200個出そう。おにぎりをこのときに何個、夕ご飯で何個出そう」とか決めて。

それから、物資の倉庫は、誰でも入って中を見ることができないような部屋にしました。

朝食はパンだったのですけれども、「質素だ」と苦情が出たので、「あそこにあるじゃないか、何で出さんとや?」と言われたらあかんって。

そういう方は本当に一部の方ですけれど。



4

## 物資配分の難しさ 余ったおむつと渡せなかった水

熊本市 50代 公民館職員 男性

市に連絡すると、避難所で必要なものは持ってきてくれました。

例えば、赤ちゃんのおむつも届きましたよ。でも、赤ちゃんは他の人より早めに、避難所からもっと安全な場所に移動していったので、結局、おむつはたくさん余ったのです。

それは、職員が帰り道に、近くの保育園や幼稚園に配りました。

一方で、地震のあと一日目、二日目くらいには、物資がどれだけ来るか先が見えなかったもので、希望通りに配分することができませんでした。避難所に様々な方が通りすがりに水をくださいと来られたのですが、避難している方に取っておかなければならないので、「すみません」と泣く泣くお断りしました。そのときすごく心苦しかったのを覚えています。叱られもしました。

あとから思えば、物資は三日目からたくさん届くことが分かったので、どんどん惜しみなく出せばよかったのですが。

失敗というか、心残りですね。今でも鮮明に記憶に残っています。



## 本音を引き出せる 日頃のつながりの大切さ

熊本市 50代 小学校教諭 男性

他の先生方が、避難所の方々の声を聞いて、ニーズに合わせて色々なものを整えていったところが、自分は感動的でしたね。



それは、日頃、地域の方や保護者とのつながりがあったからできたのかなと思っていて。つながりがあるから、思い出話なんかも交えながら色々な話ができて、本音も引き出した。それで、何が不自由かとか、何が必要なのかとかが掴めたんだろうなと思います。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、保護者と顔を合わせて繋がることができている状況ですけれど、こんな状況であの地震が起こったら、あの時と同じ避難所運営ができるかなという疑問だと思うのですよね。

だからやはり、日頃からしっかり保護者と仲良くなっておくとか、どんな家庭環境なのかを把握しておくこととかが大事ななと思いました。



## わたしたちの避難所運営とこれから

熊本市 50代 公民館職員 男性

学校の先生方は、日ごろから何十人という子どもたちを相手に、食事の配膳や物資の管理を経験されているので、避難所でも、経験のない方よりもうまくできたのかなと思います。



また、学校で人権教育に取り組んでいる視点からも、避難者のなかで配慮の必要な方にもより目がいったのでしょう。こういった日頃の取組みにより、運営もスムーズにいくところがたくさんありました。

今は、日常のつながりが一番の防災だと思っていて、公民館で企画をするときも、その視点を常に持っています。

秋津まちづくりセンターで防災をテーマにまちづくりを進めていますが、そういった取組みも意識するようになりました。

さらに、その後は他の地域で起こる災害に目がいくようになって、実際、被災地のボランティアにも行きました。

何かできる形で、あの時のお返しができたらと思って。



7

## 震度7の衝撃 本当に何もすることができない

熊本市 60代 民生委員 女性

地震の揺れを体験する体験車がありますよね。以前、デイサービスの防災訓練で、震度7を体験したことがあるんです。震度7が来たら何もできないと、その時に思いました。

実際に震度7が来てみたら、もう本当に、何もすることができない。テーブルの下に潜り込むこともできず、「ああ～来たよね」って、それだけ。観音開きの食器棚があるんですけど、私の目の前でそれがパカ～っと、スローモーションのように開いて、私のお宝のお茶碗がほとんどすべてジャガジャガジャガと落ちて、台所はすごいことになりました。

本震がきた時は、前震の片付けでくたくたに疲れていたのでもっとしっかり寝ていたら、下からド～んと突き上げるような音と揺れで、やはりなすすべもありませんでした。

前震のあとに手伝いに来ていた38歳の息子は、本震の震度7が初めての体験でした。

仕事柄、大抵のことには驚かない人なのですが、「ウワ～!」と悲鳴をあげましたよ。



## 近所みんなで歌いながら明かした本震の夜

熊本市 60代 民生委員 女性

うちの近所は仲が良いんです。だから、前震の翌日も集まってみんなで話をしていると、お隣さんが一人暮らしの私に、「一人でおったら恐ろしいけん、うちに泊まりなさい」と言ってくれたので、泊まって一緒に過ごしました。

次の日も泊まったところ、今度は本震がグラツときて。

お隣さんと一緒に外に出ると、近所の人たちもみんな集まってきて、毛布なんかを持ってきて堤防で一晩過ごしました。

幸いにも、近所では家がつぶれるような被害はあまりなくて。

明るい人が多くて、「なるようにしかならないし、とにかく命があったから、なんとかまた頑張ろうね」とか言いながら、時々歌ったりして、本震の夜が明けました。



## 地域みんなで炊き出し協力

熊本市 70代 民生委員 女性

本震の翌朝、避難所となっていた小学校に、愛知県のほうから寸胴や豆腐、味噌などが届いたので、他の民生委員と話をし、炊き出しをしようということになりました。

体育館の中で協力してくれる人を募ったら13人の方が手を挙げてくださって、皆で豚汁を作りました。すごく時間がかかりましたが、その時は食べるものがなかったこともあって、とても美味しかったですね。

そのあとも、民生委員で当番を決めて、自治会にテントを張ってもらったり、他のボランティアさんに材料を集めてもらったりして、何度も炊き出しをしました。民生委員という立場でこういった活動ができたことが、良かったなと思います。



## 声掛けを通じて自分自身も回復

熊本市 60代 民生委員 女性

自宅では台所の被害が一番ひどかったのですが、私自身がいつもそこにいるので、めまいと吐き気と、ふわふわふわーとしたような感覚が、6月ぐらいまでずっと続いていました。他の民生委員に話したら、「そういうときは外に行った方がいいよ」と言われたので、地震後2週間ぐらい、物資配布のお手伝いをすることにしました。

自治会長たちが集めてきてくれた物資を、地域の必要な方に配って回りました。民生委員として、気になる方に「元気ですか」と声をかけることができたし、徐々に感覚も戻っていったので良かったと思いました。



## 近所付き合いのない住民も分け隔てなく

熊本市 70代 民生委員 女性

地域に全く近所付き合いのない50歳ぐらいの女性がいて、近所の方が「あそこの家は壁が崩れている」と私に伝えてきたんです。行ってみると、女性は仏間にじっとしゃがんでいらっしやる。近所にお話をする人もなく、誰にも相談できないでいたのです。

いろいろお話してから、「避難所に行こう」と声をかけたら、素直に「はい」と答えてくれました。いつも笑顔がないような人でしたけれど、怖かったんでしょうね。

しばらく小学校に避難していましたが、NPOのボランティアの方が面倒をみてくれて、仮設住宅に移ったようで安心しました。



12

## 要援護者名簿の負担 一人で抱えた大変な思い

熊本市 70代 民生委員 女性

民生委員と自治会長だけに避難行動要援護者の名簿が来るんですが、それは負担になりました。私は6人の名簿を持っていたので、その6人の安否をどうしても確認しなければという気持ちがあつて。

何度も足を運んだり、まだ揺れているのに家を飛び出そうとして家族から止められたりすることもありました。ある方は、探しても探しても見つからず、子どもさんたちに電話しても出してもらえなかったのですが、どうやら別の校区に避難していたようです。それから、私はその校区の民生委員さんや校長先生から度々呼び出されました。

歩いては行けないので自分の車を運転してその方の避難先の学校に行くと、ただ話したいだけの様子なんですよ。

それを何度か繰り返したあと、避難先を移したようで、訪ねてみたら私のことを覚えていらっやらない。私があの時、面談に行ったことを説明しても「はあ？」という感じで。

私一人が大変な思いをして、心が折れそうになりました。



13

## 目的をもって生きよう

### ショックだったけれど励まされた言葉

熊本市 60代 民生委員 女性

地震のあと、以前、我が家を建てた会社の現場の方が見に来て、「熊本も大変ですけど、あなたたちはまだよかほうばい」と言われたんです。家は傾いているし、潰れているし、生活をどうしようってみんな思っているときに、何でこんなこと言うんだろうと、最初はショックでした。

でも、続けてこうも言われました。「阪神大震災の時は地震の上に火災が起きたので、何でも燃えてしまった。東北の方は、地震後に津波が来て、本当に土台だけ残して何もかもなくなってしまった。でもあなたたちは、まだ家があつて、倒れて傾いていてもそこから必要なものを取り出そうと思えば出せるし、アルバムだって、雨で濡れていなければそこに残っているんですよ」と。

だから私たちも、人生のどん底に突き落とされたという思いでしたが、目的をもって生きることに対してもっとがんばらなきゃと思って、すごく励まされました。



## わがまま？ 高齢者の避難支援の難しさ

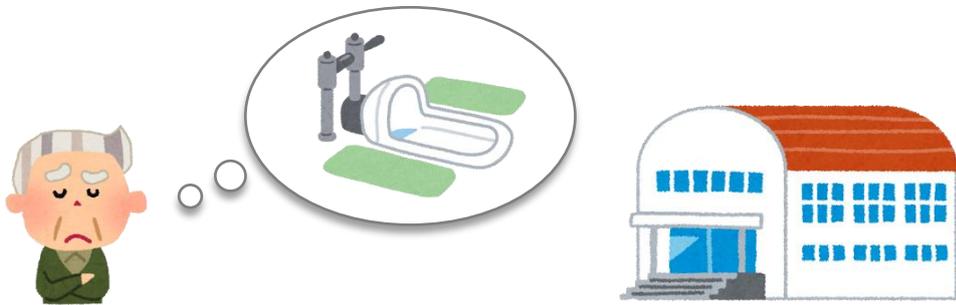
熊本市 70代 民生委員 女性

民生委員ですから、まず一人暮らしの高齢者のところに行きました。

最初に訪問した方は、もう何をしたいかわからない様子で戸惑って、家の中をドンドンと叩いていらっしゃった。「怖い」と言うので、「じゃあ一緒に避難所に行こう」と車で連れて行き、「ここに居てね」と伝えて、また別の高齢者のところへ行きました。

次の日に中学校に行くと、最初に連れて行った方がいないんですよ。自宅を訪ねると「ああいうところにはいたくない。壊れた家の中をちょっと片づけておった方がいい」と。

高齢者はわがまま。ただ、足が悪いとか、糖尿病だとか、色々と体調の問題があるんですよね。その方も足が悪いものだから、避難所ではトイレにも行きづらかったみたいで。



## 何とかして届けたい支援物資

熊本市 70代 民生委員 女性

ずっと避難所に通っていると、避難所となっていた公民館や小学校に来られない方々は、大変な思いをしていると感じましたね。

小学校の体育館には支援物資がたくさんあるんだけど、私たちには権限がないので、食べ物がないからといって外から来られた人に、勝手にあげられないんです。そういうのは、なにかもどかしさがありました。

よく動かれる若いボランティアさんがいて、困っている人がいると伝えると、すぐに食べ物とかいろいろなものを持って行ってくださって、助かりました。

泣きながら来たおじいちゃんに対しても何も渡してあげられなくて、「ごめんね」と言って住所を聞いて、個人のボランティアなどが置いていったものをかき集めて、あとでそのボランティアさんに届けてもらう形で。

それは本当に喜ばれましたけれどね。



## ささいな相談事も 自分にできることがあれば

熊本市 70代 民生委員 男性

地震のあと、一人暮らしの高齢者宅をまわりました。あるお宅は「一部損壊」の判定で、その時は何の支援金も出なかったようですが、「中をちょっと見て」と言われるので上がってみたら、めちゃくちゃなんです。そこで、とにかく市に電話してもう一度見に来てもらったところ、「半壊以上」になりました。50万円ぐらいもらえたのでしょうか、えらく感謝されました。

それから、その家を処分するときに必要なものを処分して、価値のありそうなものは知り合いの古物商にみてもらったところ、16万円ぐらいで買い取ってもらったのです。これもかなり喜ばれていましたね。お年寄りの方には相談事が色々あって、どうにもできないことは市やその他に頼むけれど、自分ができることがあればと、お手伝いをしていました。



## いざというときのために 若者が参加する楽しい防災活動を

熊本市 70代 民生委員 女性

高齢者の二人暮らしや老々介護の家庭では、地震で仏壇やタンス、食器棚が倒れたりしたら、それ自体を起こせないんですよ。社会福祉協議会にかけあっても「準備ができていないからちょっと待ってね」と、3日間ぐらいは倒れたままになってしまう。だから一番に頼りになるのが民生委員で、「何とかしてくれ」と言われるのですが、私たちが手伝ってもどうせ力がないけんダメですね。

昔、消防団ってありましたよね。若者が消防団の中に入るから、そういう団体があったら非常に良いと思います。民生委員たちは、いざというときにはそりゃ動きますけれど、体力的に動けるのはやっぱり若者です。市役所の人たちも、道が通れないなどで、すぐには来られんのですよ。

だから防災訓練も、消防団に入るような若者に参加してもらおうと良いですよ。日頃から集まって、みんなで集まると楽しいと思える活動にしていかなと。



## 「一日前プロジェクト」から生まれた エピソード

秋津校区は、令和元年度に内閣府の「地区防災計画策定支援地区」に選定され、「熊本市秋津校区 地区防災計画」を策定されました。

その際、「一日前プロジェクト」にも取り組まれ、たくさんのエピソードが生まれました。

ここからは、内閣府のホームページに掲載されている秋津校区のエピソードをご紹介します。

### 寝る場所は家、車、テント？ 子どもが選んでおうちごっこ

熊本市 40代 男性（当時、小学生の子の保護者）

前震のとき、とりあえず自宅前の公園へ出ました。親の不安が移ったのか子どもたちは興奮状態で、夜10時なのに非常にテンションが高かった。

そこで、ブルーシートとテント、キャンプ道具等、あのあたりに片付けていたよなど思い出しながら引っ張り出して、テントを張ったのです。おうちごっこをして気持ちが収まればいいし、そこで寝られればいいやと。

本震のあと、子どもたちが家で寝ることをますます怖がったので、寝る場所は下の子が決めることにしました。そろそろ家に戻ってもいいと思ったら家に戻る、テントがよければテント、車の中がよければ車の中、と三タイプ選べるようにしました。

なるべく一週間、子どもと楽しむようにしました。

キャンプ道具があって比較的困らない状況だったこともあり、子どもの前で悲壮感を出さずに、前向きに乗り切りました。



## いつもの町内放送でほっと安心

熊本市 40代 女性(当時、小学生の子の保護者)

市内でも珍しいと思うのですが、うちの町内には町内放送があります。前震の後、すぐに自治会長さんが「町内の皆さん、ゆっくりでいいから公民館に来てください」と放送してくれたのです。

いつもの聞き慣れた声で放送が流れるのを聞いて、とても安心しました。

自治会長さんも被災しているのに、もう私たちにむけて放送を流して下さっているのだと気づき、我に返って集中して耳を傾けたのですね。「建物のない道路に出てください」と聞こえたので出てみると、それまでザワザワしていた近所の方もおもむろに建物のない



ところに集まってきて、声を掛け合いました。

初めての大きな地震で、どうしたらいいかわからなかったのが、近所の方にも声をかけていただいたりして、そういうのはありがたかったですね。

自治会とか近所づきあいとか、大事だなと思いました。

## 公園は無法地帯 防災倉庫は空っぽに

熊本市 70代 男性(自治会長)

この地域には広い公園があります。

今は仮設住宅が建っているのですが、地震直後は、どこの人かわからない避難者で溢れかえり、地元住民が不安を感じるような無法地帯になっていました。

その公園に、いざという時に備えて防災倉庫が設置されていたので、地震後に倉庫に備品をとりに行ったのですが、啞然としました。

誰が開けたか知らないけれど、鍵が勝手に外されて、中身は空っぽになっていました。

いつ、誰が開けたのか、何をどれだけ持っていったのか、何もわかりません。備えておいたのに、地域の人のために使うことができませんでした。

いざというときに、みんなのために使えるよう管理しなければならなかった。

せめて誰が鍵を持っているのか、地域のなかで把握しておけばよかったですよ。



## 出産目前で地震

### 親戚や友人から集めた物資で産院再開

熊本市 40代 女性(当時、小学生の子の保護者)

弟のお嫁さんが臨月で、前震の日はいつ生まれてもおかしくない状況でした。それなのに、かかっていた産婦人科が、食材の入手が困難で食事の提供ができないためお産はできないということになって。

他にどの病院も受け入れてくれませんでした。その状況を宮崎に住む妹に話したところ、妹の周囲の方が、一週間分くらいの生鮮食品を寄付金で買い込み、ミニバンがパンパンになるくらい食材と物資を詰め込んで、

行く先々の通行止めを迂回しながら一日かけてきてくれました。その物資を全部病院に寄付したところ、お産を受け入れられることになり、本震のあった16日に無事出産できたのです。

宮崎からの支援がなかったら、出産は難しかったらと思います。



## 最初はバナナを死ぬほどもぎった

熊本市 30代 女性(行政職員)

自宅が避難所の近くだったため、地震直後に避難者の対応に向かいました。避難所開設後は、水道を止める旨の連絡があったため、トイレの水の確保が問題となりました。

水くみの備えなどありませんでしたから、朝になるとすぐに、のぼりを立てる台や、大きなゴミバケツをかき集め、神社へ水くみに向かいました。

水問題に奔走する中、物資の対応もすぐに必要になりました。最初はバナナ。避難所に房で届いたバナナを死ぬほどもぎりました。

その後も、コンビニやボランティアから届けられた物資を小分けにして配付したり、炊出しをしたりしました。今では100人分の分量がわかります。

地震直後から初めて経験する問題が次々と発生し、人数も時間も限られるなかで対応しなければならず、毎日必死でした。



23

## 避難後の連絡先求め 一日中駆けずり回る

熊本市 70代 男性(自治会長)

自分は自治会長だから、色々相談を受けるのですよ。地震の時も「隣の家のブロック塀が自分の家の壁に当たって部屋まで入ってきて。隣がおらんからどこに連絡すればいいかわからん」と相談を受けました。

雨が降ったら大変だし早くなんとかせんといかん。だからといって勝手にはできんてしよ。でも、連絡の取りようがない。避難先を知るのに一日中駆けずり回ることになりましたよ。隣の人でも誰でもいいから、どこにいるか、避難後の連絡先をせめて近所の人に教えてから避難してもらいたいですね。



24

## ブルーシート張りで気まずい思い

熊本市 70代 男性(自治会長)

夜中に大きな地震が来て、家族で秋津小学校に避難していました。朝になって自宅に帰ったら、自宅のブロック塀が道側に倒れこんで10mくらい道をふさいでいました。

通学路だし車も通れなくなっていたので、外構工事を専門にしている友人に頼んで、ブロック塀を撤去してもらいました。ついでに、屋根瓦も全部落ちてしまっていたので、屋根に上がってブルーシートを張ってもらったのですよ。専門外だし、いま思えば危ない作業だったのですが、何とか引き受けてくれました。

そうしたら、隣の家の人にも屋根瓦が落ちているものだから、「俺のところも頼む」と言われました。でも友人は、「俺はよそのところはできん」と断って帰りました。

隣の人にも、友人にも、気まずい思いをさせてしまい申し訳なかった。

友人に無理に頼まず、専門の人を頼ればよかったと思いました。



## 高齢夫婦の安否確認「頼んでない」 負けるもんかと続けた見守り活動で心開く

熊本市 70代 男性(自治会長)

1回目の地震で自宅は半壊。その後、家に妻と娘を残して、安否確認のため地域全戸に声かけを行いました。地域には、奥さんは寝たきり、旦那さんは両杖ついてやっと歩けるような高齢夫婦がいて、いつも気にしていたので、まずそこへ行きました。

すると開口一番、「わたしたちは、自治会に対しては助けてくれなんて一言も言っていない」と言われたのです。地域に民生委員もおりますが、女性二人なのですぐに声かけに向かうのは難しかったのだと思います。帰る前には、「早くボランティアを呼んでくれ」と。



それでも負けるものかと声かけを続けていたら、今では顔をみると向こうから声をかけてくれるようになりました。障がいや寝たきりって他人に見られたくないものなので、壁を作っているのですね。壁をとっばらったら、向こうから近づいてくるようになると思うのです。みんながそうではないとは思いますが。

## 「一緒に、紅白？」～避難所運営の難しさ～

熊本市 50代 男性(行政職員)

地震直後から、避難所運営者として毎日新たに発生する問題解決に奔走し、「ああ、なんとか一日を無事に終えられた」と思う日々が長く続きました。「いつまでこんな生活が続くのだろう。地獄や。早く元の生活に戻りたい」と思っていたのに、いつの間にか避難所を運営することが当たり前ようになっていました。

ある時、避難者に「一緒に、このテレビで紅白が見られるね」と声をかけられ、はっと気づいたのです。避難所運営は、被災者を早く元の生活に戻すことを目的として運営しなければならなかったと。

避難所に長く残る方の多くは、高齢の独り暮らしの方など、避難所を出てからの生活について考えることが難しい方でした。

地震直後の避難所運営の大変さから、目の前の課題にばかり意識がいていましたが、避難所を出た後の生活の見通しがつけられるような運営のしかたが必要だったと思いました。





## どうにも言いようがない 地震の恐ろしさ

熊本市 70代 民生委員 男性

前震のとき、家を出るとすぐに知人の女性が「うちのお母さんが家におるはずだから、とにかく見て」と言ってきました。90歳ぐらいのおばあさんが、みのこ造りの大きい家に一人で住んでいたのですが、地震後に駆け付けた娘さんが外から声をかけても反応がないと。

だいたい家の中の間取りはわかっていたので、近くにいた人と2人で中を探しましたが、いらっしゃらなくて。

「おかしかね～」と言いながら2階に上がろうとしたところ、外に近所の人がたくさん集まっていたので、「ここのおばあさん誰か知らんね？」と聞くと、「次男の人が連れて行きましたよ」と。「ああ、よかったね」と言って、みんな帰っていきました。

その後、本震の翌朝にその家の前を通ると、家がない。屋根の一番上から道路までぺっちゃんこになっていたんです。

言ってもわからんでしょ、あの怖さは。どうにも言いようがない。